

Lightfair International 2003

New York, USA 2003/05/05-08

窪田 麻里 + 井元 純子

新緑の美しい風薫る5月、2003年度ライトフェアがニューヨークの Javits Convention Center で開催された。今年はイラク戦争や SARS の影響もあり、一抹の不安を感じながらの渡米となった。しかし、行ってしまえばそこは NYC、世界の情勢不安とは一線を画すような力強さがみなぎっていた。



■ 2003年度の傾向

今回のライトフェアの主な傾向として目立ったのは、相変わらず激しい開発競争が繰り広げられている高効率・長寿命のLED（発光ダイオード）を光源として使った照明器具である。米国メーカーであるカラーキネティックスを筆頭に、大変カラフルでオペレーションによって色の変化も自在な製品が、ライン照明器具から面発光するパネルまで、様々な形態なものが発表されていた。

展示初日の朝には、会場内で展示されている新製品の審査発表会が行われた。そこでは、カナダの TIR System 社の高輝度LEDを用いたフラッドライト製品が、最高賞である Best New Product of the Year を受賞した。その他、主要な授賞部門である技術革新賞 (Technical Innovation Award) には日亜化学工業の電球色のLEDが選出されるなど、やはりLED製品の台頭が著しく現れる結果となった。

ランプメーカーの新しいラインナップとして顕著だったのは、高ワットのコンパクト蛍光灯である。120W、85W、60Wといったルーメン（光束の単位）出力も高く、長寿命なコンパクト蛍光灯が各ブースで発表されていた。

■ ライトフェアの別の顔

さて、この毎年アメリカで開催されるライトフェアであるが、目玉は何も色んなメーカーの製品展示に限ったことではない。今まで特にクローズアップされたことはなかったが、5日間の開期中には、実に様々な学会やワークショップ、セミナーが開かれている。ここでは、世界中から集まった照明業界の関係者が、発表をしたりそれを聞いたりして、お互いの知識を高められるような機会が与え



られているのだ。

今回、そのセミナーの一つに、照明探偵団の活動を団長が紹介する貴重な機会が設けられた。今までに行った探偵団の活動報告やその意義、街歩き調査のやり方などを、数多くの事例写真とともに1時間半に渡って紹介した。セミナー後には、早速入団したいと申し出てくるアメリカ人の受講者も現れ、世界中に探偵仲間を増やす良いチャンスとなった。

■ NY レポート

最後に、ライトフェアと直接関係はないのだが、折角訪れたニューヨークの様子を少しレポートする。NYといえば、未だにおよそ2年前のWTCテロ攻撃の印象が強く残るが、今回は実際にその現場を訪ねてきた。現在は、ビルの瓦礫の山はすっかり取り除かれて、地下の再建が着々と行われているようだ。しかし、グラウンド・ゼロ周辺のビルは、まだその傷跡を深く残したまま建っており、このエリア全体が再建されるのにはまだまだ道のりが長く感じられた。今年に入り、再建デザインコンペで世界一の高さとなる541mのスパイラルビルの建設を含む案が選出されたが、今後どのようにNYの新しい顔が形成されることになるのか、大変気になるところである。（井元 純子）



1. Javits Convention Center 外観
2. 展示会場の全景
3. 今年最高賞を受賞した TIR 社の LED フラッドライト
4. 探偵団活動を介绍する団長のセミナー
5. グラウンド・ゼロ

■街歩きレポート・その1

国内最大の市街地再開発事業である六本木ヒルズがついに4月25日にオープンを迎えました。今回はその六本木ヒルズを訪ねての街歩きです。

オープンしてわずか3週間、しかも金曜日の夜とあって沢山の人でにぎわっています。蜘蛛のアート下に集合した団員たちは、まず、森タワー49階のアカデミーヒルズへと向かいます。49階へ下りた団員を目前にひかえる東京タワーと美しい東京の夜景が迎えてくれました。六本木ヒルズも東京も非常によく見渡せます。タワーを降り、ライトアップされたアートを見ながら、環状3号線デッキ下へ。ここでは、内照式サインのランプも今は白色系ですが、今後、他と同じ3000Kに交換される予定との話も聞くことができました。つづいて、毛利庭園を通り、テレビ朝日のほうへ向かいます。内原智史さんが照明を担当された控えめな照明が、毛利庭園の静けさを引き立たせているように思えました。

テレビ朝日のわきをすり抜けると、けやき坂の入り口。ひときは明るい光のウェルカムマットが、街区へ入る車両を迎え入れていました。

住宅エリアでは、落ち着いたデザインの中にも埋込みのファイバー照明があったりと、住人を楽しませる工夫がみられます。しかし、住戸のベランダに備えられたダウンライトが眩しいと団員からも不評の声があがっていました。その後、アートベンチやブランドショップなどを眺めつつ、今回の街歩きを終わりました。

まだまだ、たくさん見所がありますが、さすがに一度で全ては見れませんね。

今回の街歩きで印象に残ったことは、街区全体でデザインを統制しようという試みが感じられたこと。照明に限らず、TSUTAYAやスターバックスの外観も、街になじむようにデザインされているようで、統一感のある“街”をつくらうという設計者のこだわりが感じられました。しかしながら、庭園灯のポール部分が折れ曲げられているのを見て、街の景観を保つ難しさも感じさせられました。

しっかりと計画されてつくりあげられた都市をどのように保っていくのかでしょうか。本当に大事なものはこれからのかもしれません。(奥中 顕子)



1



2



3

1. 森タワーと蜘蛛のアート“ママン”
2. 住宅エリアの埋込みファイバー照明
3. 折り曲げられた庭園灯を見る団員たち

■街歩きレポート・その2

まず森タワー。ライトアップはファイバーあり、ネオンあり、アッパースポットあり、カラーありと、最近の東京の新築ビルにおいてなかなか見られない程勢いを感じ、ライトアップを競い合うかのような香港の高層ビル群を思い起こさせた。

またテレ朝本社は、ファサードに面する廊下のダウンライトが最初は白色であったが、街並みとの係わりにより、後程電球色にランプ交換した等、裏話が興味深かった。

ディテールとして感じたのは、要素一つ一つに対する計画が綿密にされていた事である。街路に使用される器具の徹底的なグレアカットや配光制御など、照明器具を覗き込むと隠れた工夫が見つけられた。

個人的に気に入ったのは、住宅エリア公園具である。すべり台の下の三角形の空間に、

一方向のみに光を絞った照明が配されており、どきっとした。普通ならすべる台を明るくと考えそうな所だが、敢えて下の黒子的なスペースから光が漏れている。幼い頃かくれんぼや秘密話をすべり台の下でした事を思い出した。

あれだけの施設が密集しているだけあり、光の要素も手法も多種多様であり、街歩きをしていて大変勉強になり、ヒントを多々得ることが出来た。

ただ、これだけの光を六本木ヒルズという街全体としての視点で計画することは相当な作業だと思った。(安西 有紀)

第21回 研究会サロン 2003年05月21日

街歩き、上海調査報告、客家調査報告など

5月21日のサロンでは、平岩団員による六本木ヒルズの街歩き調査報告、早川団員による上海の都市照明調査報告、面出団長による中国・客家の調査報告、ドイツ人照明デザイナークリスによる最近のプロジェクト報告などがありました。

5月21日のサロンでは、六本木ヒルズの街歩き調査、上海の都市照明調査、中国の客家団体の調査報告、ドイツ人照明デザイナークリスによる最近のプロジェクトなどが紹介されました。

まず、平岩団員より5月19日の六本木ヒルズの街歩き調査が報告されました。六本木ヒルズは、4月25日にオープンしたばかりの今とても旬な場所で、LPAもこのプロジェクトの照明デザインに携わってきました。サロンでは、面出団長からプロジェクトにまつわる小話なども聞くことができました。照明デザインというのは、必ずしも照明デザイナーの思い通りにいくものではないらしく、例えば、思いがけない光の筋が出てしまったりするようです。そのような時は、どうしてそのような現象が起きてしまうのかを推理しなければならない、とのこと。団員の中からは、昼間も見に行っただのですが、昼間より夜の方がきれいでした、といった照明デザイナー冥利に尽きる、建築家泣かせなコメントもありました。

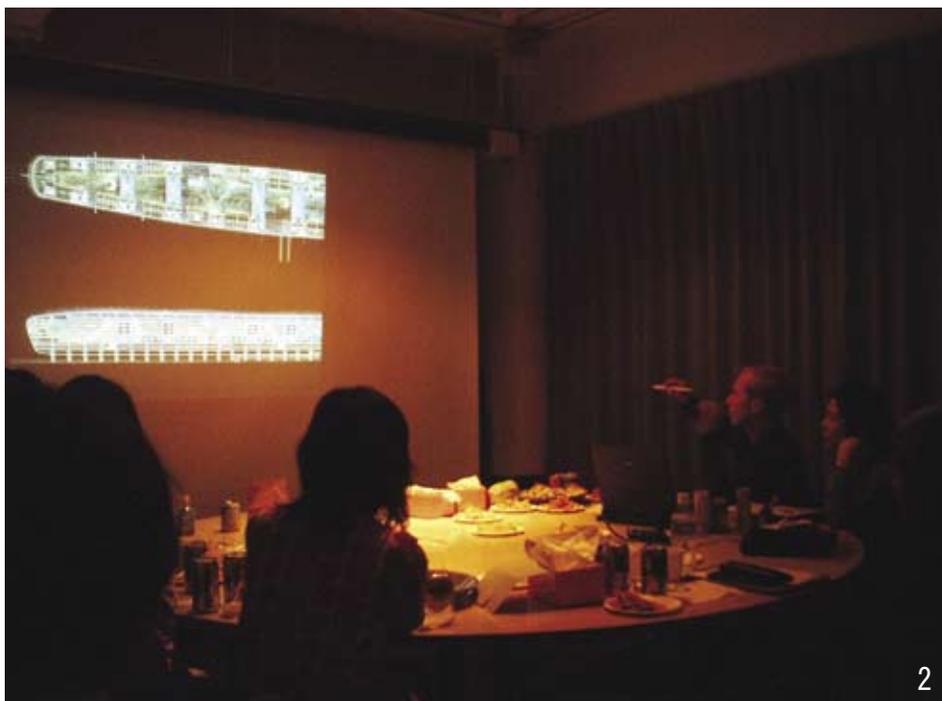
次に、早川団員により上海の都市照明調査が報告されました。早川団員の定点撮影による夜景写真は見事で、団員から喚声此起彼伏のほどでした。いい写真を撮ろう、この夜景を伝えたいという必死の思いで、同じ場所に長い時間留まったり、足を運んだりしたことでしょう。その労力には大変頭が下がります。続いて、面出団長による客家の調査について報告がありました。客家とは、福建省に古くからある円形状の要塞のような集落のことです。ここは未だ観光地化されておらず、今のうちに行っておこうとのことでしたが、真っ暗だったため、夜景の写真はほとんどありませんでした。上海の強烈な夜景とは全く対照的な夜景に、同じ国の報告をしているとは思えないほどです。

最後に、TransnationalTanteida 関連の打合せのために来日しているドイツ人照明デザイナークリスが所属しているウルリケ・ブランティエの事務所による最近のプロジェクトの紹介が行われました。照明探偵団の活動もインターナショナルになりつつあることを感じました。そのうち、英語ができないとサロンにも参加しづらくなるのでしょうか。

(菅又 健雄)



1



2



3

1. 面出団長による推理
2. ドイツ人照明デザイナークリスによるプロジェクト紹介
3. 団員による間接照明を積極的に取り入れたコンビニの紹介

Eyes in Tokyo 第3回

Light and Life in Tokyo Foo Wan Ching

LPA シンガポールオフィスから3ヶ月間、東京オフィスに研修に来ていたWan Ching。身を粉にして朝から晩まで働く日本人の姿に半ば呆れ、驚きながらも、『“フィフスエレメント”や“ブレードランナー”のような』というワンダーランド東京で発見した光は何だったのでしょうか？

One can probably pick out instantly the inspiration of movies in the likes of sci-fi movies such as *The Fifth Element* or *Blade Runner* once in the city of Tokyo – a very distinct yet familiar sense of wonderland created by the night scene, or to be more specific, the light-scene. One is not surprised by this creation. Japan is well known to be one of most hardworking societies on the planet, with the high pressures of work life and daily routine. There is little wonder that the city evolves to help the city dweller escape his daily routine into an outer world of 'paradise', or vice versa?

Coming from a country that uses light in a very utilitarian way, Tokyo has definitely set up a new perspective and directive of how the urban landscape can be transform into another world once the city dweller escapes the four walls of his work when the curtains of daytime falls. A typical city scene in Tokyo will be the grey, tall office buildings line the roads forming a homogeneous labyrinth for the tourist: a same familiar density as that of the CBD and town areas of Singapore. Such is are the commercial hubs of Shinbashi and Nishi-Shinjuku, or shopping zones of Shibuya and West Shinjuku. In the daytime, for one who does not enter this matrix daily, the monotony of this visual landscape can be a little disorientating.

However, come nightfall, Nishi-Shinjuku in particular raises the curtains of rainbow neon light, reminding one of the scenes of the *Fifth Element* or *Blade Runner*, in the rain, minus the flying vehicles; the visual experience is dominated by colorful and animated

advertising signage overhead. The simple energy-saving neon light also replaces the average street, in a way, providing the general sense of life and security at night to the otherwise seedy-looking streets of Nishi-Shinjuku. The hard landscape comes alive, creating the atmosphere of revelry and excitement.

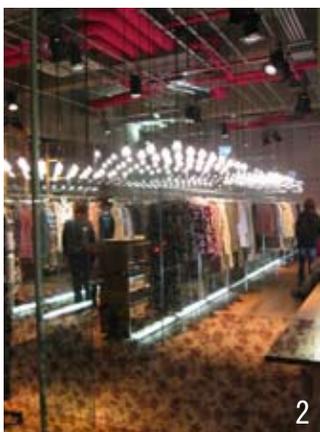
On the smaller scale, the individual spaces quieten down to private retreats of the public urban courtyards. Simple examples are that of the Shiodome in Shinbashi and I-Land Patio in Shinjuku. They offer quiet retreats of the office worker in the city. In the Shiodome, the landscape sculptures are turned into light beacons at night, heralding the late workers to bask in the moonlight and enjoy the quiet after a hectic day's work. The I-Land Patio in the busy office hub of Shinjuku turns into a surreal landscape of purple, red and amber, cutting off the space of the courtyard from the rest of the busy world. Combined with light and sound, the person himself and the people around him enter into a new place of meditation and quiet within or without. From where I come from, where the streets are mostly lit by the orange wash by very low Ra low-pressure sodium lamps, it is a wonderland.

Apart from the daily living space, the Japanese also harness this new fantasy world of light into their other form of escape: shopping. The boutique-lined shopping district of Daikanyama is an example. It consists of buildings, mostly 3-4 storeys high with different types of specialty shops and restaurants occupying all levels. The streets are tree-lined avenues, conducive for leisurely

window-shopping. The lighting environment is largely defined by the display lighting of retail shops, focused from the street level upwards to about 3-4 stories high. The tenants on each level use different types and colors of lighting (however, carefully balanced) to create urban lanterns on the night.

What is interesting in this landscape is the interaction between the building skin and light. As the sun sets, the two-dimensional facade disappears and the space of the shopping street extends beyond the street itself. The sensitive balance of color temperatures between the shops and buildings converges the spaces to become one. It helps that this is not violently contrasted by the street and pedestrian lighting, in which higher color temperature mercury vapor lamps and fluorescent lamps are used. The street is internalized and becomes the shopping space. Needless to say, the displays at the shops are most visually arresting.

These are one or two of the few instances that time permits me to relate. If I stay longer perhaps I will find out more. But it is little wonder, or rather it very much explains the jam-packed trains at the midnight rush hour, and the happy drunken faces of the reveler slumped at the train station each night. Something that still baffles the gai-jin. With such paradises at their doorsteps, the Tokyo-ite can easily access in and out of their fantasy worlds with much ease and comfort, and 12 hours a day! And if time permits, perhaps he himself too will be sucked into this nether land, and with little resistance, I would say. No wonder! (Foo Wan Ching)



1. このスカイスクレーパーの迫力にはやっぱりみんな驚く
2. 代官山の新しいエリアのお店は照明も楽しい
3. 寿司屋のカウンターの熱気が伝わってきます
4. 赤提灯はガイジンの目にもホッとさせる景色らしい

面出の探偵ノート

●第32号 2003年06月15日(日)

NYCでの講演会／あまり評判が良くなかったみたいだけど・・・

あつという間にNYCで過ごした一週間から一月がたってしまったようです。その間何をしていたのでしょうか。う～ん、過ぎ去った事をどんどん忘れていく得意技に益々磨きがかかってきたようで、時間が過ぎていく事は解るし、今日しなければならぬことは理解しているが、昨日のことや明後日のことを考えるいとまもなく忘れていく。これも性分なのでしょうかね。今のこのみに気持ちを集中するだけの毎日です。そんなわけでこの原稿もずいぶん前に依頼され、何度となく催促されていながら、過去の事実を思い出す事の気だるさゆえか、どうも筆が進まず今日に至っている。しかしもう本当に探偵団通信の締め切り限界がきたらしい。さて5月6日にNYCのLight Fair 2003で行った私の講演会について報告しようと思います。

昨年の9月にNYCのParsonsで学生向け特別講義をしたときに、照明探偵団の活動がとても話題を呼んだことがあったのです。世界の夜景調査のスライドや、各種講演会の開催、ライトアップゲリラなどの活動が面白そうに目に映った様子です。そこに参加していた先生方の要望もあり、毎年1回開催されているLight Fair Internationalに招待され、1時間半ほどのスピーチをする事になりました。テーマは“The Lighting Detectives”。これまでに行われた照明探偵団活動を分かりやすく世界中に説明してくれ・・・というものでした。それまでに私は何回か海外で照明デザインの実例を伴うレクチャーをしたことはあるのですが、仕事の話し抜きに探偵団だけ

の講演は初めてです。どうなる事かと思いましたが、私をアシストしてくれる優秀なLPAの社員は完璧に準備されたパワーポイントを作成してくれたのです。私はその内容の濃さにびっくり。あまりにパワーポイントの内容が充実していた為に、私の講演内容は概要紹介的なものになってしまったみたいです。

実は一昨日にNYから参加者のコメントをまとめたアンケートが私に届いたのですが、その内容を見ると、「突っ込みがたりない」「総論的でつまらない」「それで何が言いたいのだ」「英語の冗談がつまらない」などと、さすがアメリカ人、歯に布着せない辛辣なものも多く帰ってきました。一瞬私は泣きそうになりました。まあ、受講者も30～40ドルも払っているのですから、期待したものが得られなければ、クレームも無理ないところです。私などは1時間半もぶっとうして英語でまくし立てるだけで疲れてしまったのですか、一般大衆の受けを狙って分かりやすく説明したつもりが、(照明デザイナーの面出が話すということで)同業プロの面々が集まっていた様子でした。私にとっては予想以下の評価表が届いたので、30分ほど一人で落胆したものです。今は立ち直って、反省もし、良い評価もたくさんあったし・・・、と気持ちを入れ替えています。聴衆を見誤ると失敗します。しかしきちんと他人から厳しい評価をいただく事は自分を育てる為に必要な事だと痛感しました。最近では適当に人前で英語を話すことが多くなってきた為に、スピーチにいたる事前の戦略や準備ができていなかったか



会場で耳を傾ける聴衆たち。想像以上に厳しかった・・・

もしれません。照明デザインの仕事の紹介であれば、少々説明が整わなくても「なるほどこれはすごい照明デザインだ」と感心してもらえるのですが、探偵団の紹介はそれと違うのです。「何故それが意味を持つのか?」「どのような興味でそれが支えられているのか?」「その活動の最終ゴールは何処にあるのか?」などという論理をきちんと整理して説明しなければなりません。アメリカは批判の多い国です。勉強になります。

講演の中身は実に豊富でした。探偵団の成り立ちから、6種類の活動内容、世界の夜景スライドから出版書籍の紹介、行ってきたイベント内容、そしてトランスナショナル探偵団の誕生まで、何がどのように行われたのかを総論的に理解するには、それだけの項目が必要だったのです。しかし言いたい事がたくさんあればあるほど、注意しなければならないことは、並列的に並べてしまうと全てが印象に薄くなってしまいます。一箇所でもいいから極端に深くサンプルを紹介すべきでした。「デザインとは、たくさんさんの思いや可能性を切り捨てていくことだ」などと私は常に格好つけて学生に言っているのですが、私が今回は多くの思いを切り捨てる事ができなかったのでしょう。たくさん具の入った日本風の幕の内弁当がNYCでは受けが良くなかったという反省です。この次にはきちんとやりますよ。何歳になっても学習です。

(面出 薫)



探偵団活動について紹介する面出団長

「World Lighting Journey –世界の夜景展–」

を開催しました。

5/14-6/9 まで、松屋銀座 7 階・デザインギャラリー 1953 で「World Lighting Journey –世界の夜景展–」と題して、12 年間の歳月をかけて撮りためてきた世界 50 都市あまりの夜景を一挙公開する展示会が行われました。（主催：日本デザインコミッティー）会期中には会場で 7 名の LPA 所員によるセミナーも行われ、訪れた人達は壁いっぱい張り巡らされた世界の夜景を楽しんでいました。



ブルーの光で構成された会場での壁面パネルとプロジェクションによる展示風景



会場では面出団長によるセミナーも行われた（6月6日会場にて撮影）

★★投稿募集中★★

照明探偵団通信 vol.17（次号）の原稿を募集しています。独自の照明探偵レポート、光に思う今日の日本、照明について知りたいこと、疑問に思っていることなどなど、テーマは何でも結構です。日頃ひかり、あかりなどについて思っていることや様々なレポートを照明探偵団通信に発表してみませんか。原稿は、e-mail で送付して下さい。メール上記述でも原稿テキストファイル添付でも OK です。投稿お待ちしております！

照明探偵団・事務局
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10
ライティングプランナーズ アソシエーツ内
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023
e-mail: tanteidan@lighting.co.jp <http://www.lighting.co.jp/tanteidan/>

【照明探偵団の活動は以下の 22 社にご協賛いただいております。】

ルートロンアスカ株式会社 岩崎電気株式会社 小糸工業株式会社 株式会社菱見 カラーキネティクスジャパン株式会社 松下電工株式会社
株式会社ウシオスペックス ヤマギワ株式会社 山田照明株式会社 マックスレイ株式会社 ニッポ電機株式会社 株式会社エルコ・トートー
株式会社ウシオユーテック 日本フィリップス株式会社 トキ・コーポレーション株式会社 東芝ライテック株式会社 大光電機株式会社
金門電気株式会社 小泉産業株式会社 マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社 湘南工作販売株式会社 株式会社遠藤照明

照明探偵団日記

どんより梅雨空が何日も続くと、いい加減気分も減入ってきてしまいます。どしゃ降り雨の中を歩くのはあきらめるとしても、ちょっとぐらいの小雨だったら夜の街を歩いてみよう！いつもとは違う街の表情が見つけれられますよ。東京のオススメ散歩コースをひとつ紹介します。表参道から青山の根津美術館へと抜ける道。ヨーロッパの街では当たり前の夜のウィンドーショッピングですが、東京で楽しめる場所はまだまだ数少ないですよ。ここでは通りに面したウィンドーの商品には夜間になってもちゃんと光が残されているので、お店が開いていなくても街歩きが楽しい。表参道の美しい新緑のトンネルを後に、この洗練された通りに入る。HaaT の壁面はブルーの LED で染められ、静かなながらも個性を主張しているし、ヘルツォーグ&ド・ムロンによるオープンしたてのプラダのショップはガラスの外観が雨降りの景色の中に埋もれることなく凛としています。夜の街歩きの醍醐味は昼間と違う景色を見つけること。ま、もちろんお店が開いている時間に帰れるのにこしたことは無いんですけどね・・・

（田沼 彩子）